「里」短歌会　9月詠草

行く方の清めの花火打ち鳴らし精霊船は海へと向ふ　宮本　淑子
気にかけし仕事幾つを終へし今日熱夜涼しく日誌を閉じる　松本　幾代
吾も早や喜寿を迎ふる誕生日蝉の初鳴きしみじみと聴く　松岡　節子
在りし日の母手作りの肥後てまり色褪せしまま居間に下がれり　川口　敦子
リビングまで歩けぬ吾の手をとりて段差気づかう夫の掌ぬくし　園田トミ子
自生して初めて咲ける鬼百合に寄ればこぼるる小さき珠芽の　林　淑子
コスモスのかたへにいまだ咲きゐるはいのち燃やせし夏の向日葵　上田　安代
朝顔の紫の色うすれゐる花の命よひとひをたもて　岡本　トシ
いつしかに秋の気配の雲浮かぶちぎれ雲あり名残りの雲も　安見　朱實
折りふしの思ひを短歌に詠ひつつ四季を重ねて老いに入り行く　山城　雅子

万句の里俳句会　8月句会

蓮の露きらりと光る空の青　田中　美智
一事終へ静かに仰ぐ盆の月　吉井　綾子
落蝉の残る命を抱きにけり　丸山美代子
これだけは譲れぬ話秋暑し　岩木　敬治
夭折の弟偲ぶ盆供養　打出　貞
雷一喝閑かな古刹乱し去る　隈部　輝子
客帰る余韻残して月の庭　田島　房子
父の霊乗せてゐるやに赤蜻蛉　加藤　妙子
水音のとんぼう増やしをりにけり　北村　妙子
空蝉のすがりし草を離さざる　平山　邦子
放流の子亀誘ふ秋の潮　宮本　雅子
馬籠宿藤村生地蝉時雨　林　まつ子
感心感心　家事も育児もしよるパパ　光堀　善教
こそばいか　仲人口の美辞麗句　藤野　清子
落着かん　上座はとても窮屈か　上村　○子
過去最高　水着替えてのゴールイン　田中レイ子

肥後狂句桜会　例会入選句集より

そるが本心　地位も名誉も欲しかです　小川　繁美
こそばいか　満点じゃったカンニング　狩野　本六
そるが本心　嬉し涙の野辺送り　須藤　新生
ガラ空き　新幹線におっとられ　高倉　新米
感心感心　回覧できた寄付名簿　田中　孝幸
感心感心　馬鹿でも主たてとらす　窪田　明徳
そるが本心　拾ろた百円届けたか　田尻　浩風
そるが本心　三期は欲しい市議の椅子　高木　房惠

泗水短歌会　8月詠草

霧さつと流れ一条の陽の道に合歓の花見ゆ阿蘇の高原　長尾はるみ
窓に来て羽根振るわせて油蝉呼吸絶ゆるまで鳴きて落ちたり　中山　定子
鞍岳は美人の寝姿と伝え聞く雨の日多くて美人に逢えず　西　カオル
北窓ゆ見下す青田我が家の田にはあらねど朝な夕なに　平嶋きくえ
朝夕に猫に餌やる時間帯音残し行く飛行機のあり　宮本　峯子
久しぶり巡る散歩か畑路のもろこし畑の葉音さやさや　大島　きと
夕風に里の祭りの楽を聞く百日紅の花あかる下　吉安　永子
何時の日か亡夫に土産と編みゐたる歌集成りたる　福原美智子
今日は吉日　おくれ梅雨訪れ大暑を緩ませたり老いには最高贈り物なり　内田つね代

せせらぎ俳句会　8月例会

盆来たる死にそこないの身で供養　坂本まつえ
聞く人も泣き語り部の終戦忌　藤本　邦浩
紬織る女優しき夏館　寺本　和子
赴任地の訛の混じる帰省の子　五丁　義昭
喜雨なればその激しさも心地良し　渡辺満喜子
浴衣着し孫の背丈を見上げをり　藤本アツ子
百歳の師を寿ぐや群蜻蛉　村山　数恵
百歳媼の詩心秋を讃えをり　内村　泊虹
まどろめばあるかなきかの秋の風　渡辺ふみ子
朝顔の鉢仕立てある旧家かな　渡辺　白魚
席譲る生徒さわやか朝のバス　服部　静子
夏休み気がつけばもう後少し　（中三）渡辺　一史
遠くから花火の音だけ届けられ　（中三）渡辺　大寿

肥後狂句水笑会　8月例会

ほったらかし　金のなる木に化けとった　続　義昭
堂々と　連覇のメダル胸に下げ　清原　英坊
ふくれとる　もう十日どまもの言わん　井手　水光
熱帯夜　品もへちまも無ァ寝相　中島　五女
心配無用　媽は出張信じとる　神尾　迫水
心配無用　皆が通らす道だけん　柏原　乗仏
ふくれとる　何時の間にやらかかえとる　御手洗三代
ふくれとる　詰め放題のビニールが　宮上　美由
ふくれとる　其の顔の又むぞらしさ　平井　江彩
堂々と　賄賂だろてち受け取らす　吉岡　三水
心配無用　ボヤは隣の消防署　山隈　好茶

七城短歌会　8月詠草

野の道を買物袋下げ持ちて帰るを鞍岳山は見ている　斉藤　芳子
山間いの古代ハス田を訪ね来し差す日眩しくまかげして見る　高木　精
とく起きて庭草取りに励みたり敷物に座し涼風受けて　堀　甲子
目覚ましのアラームかと思い耳澄ます庭隈確かに蟬蟀鳴きいる　佐々　重弘
にがうりの佃煮と娘が持ち来たり味見をすれば吾より上手し　水田紗陽子
夏祭りの孫に浴衣を着せおればまた縮んだねと頭上より声聞く　池田カツ子
口笛で鶯の声吹きたれば真似る九官鳥我より上手し　村上　幾雄
吾が頭上帰る鴉か一声を残して寂しさ弥増す日暮れ　岩崎　照代
一人娘という花苗を分けくれし友が去りたり住家今日解かるる　木下　陽子
出発の前の飛行機窓に見る小花揺れいて我を見送る　松岡ミチエ

旭志文芸俳句会　8月詠草

畔切れば青田丸ごと浮きて見ゆ　水谷　ミネ
薮入りの古語も知られず盆明ける　東　芳子
軒端来て声張る雀梅雨明けり　芹川　蓉子
畑に這う背に声こぼすほととぎす　芹川のりこ
田まわりや畔にあざやか田植花　郷　ミヤ子
水飛沫緑したたる最上峡　中尾ヨシコ
九十二歳木かげで炎暑とかくれんぼ　出田みとり